

# 河上肇記念会報

No. 12  
1982. 10. 1

〒542

大阪市南区長堀橋筋一―三（丸善石油ビル）  
千代田商事内 河上肇記念会  
電話 （〇六）二五二―三六九六  
振替口座 大阪 三―三一九五

## 八二年度 総会御案内

朝夕もめっきりしのぎやすい今日この頃、いかがお過ごしですか。  
今年の総会のご案内を申し上げます。

本年は東京大学名誉教授脇村義太郎先生をお招きし、河上先生の  
想い出を語って頂き、さらに神戸大学教授一海知義先生に「河上肇  
の転期と詩」と題して講演を頂く予定です。  
多数ご参加下さるようお願い申し上げます。

一、日時 一九八二年一〇月一七日（日）

午前十一時～午後三時

二、場所 京都 法然院

三、臨時会費 四、〇〇〇円（会場費、昼食費含む）

同封のハガキで一〇月一〇日までに出欠のご返事を願います。

（お手数ですが四〇円切手を貼って下さい。）



### 1. 乗り物（京都市営バス）

- ◆ 国鉄・近鉄京都駅→5番岩倉行（浄土寺下車）  
→地下鉄四条烏丸乗換え  
32番銀閣寺行（法然院町下車）
- ◆ 阪急四条河原町駅→32番銀閣寺行（法然院町下車）
- ◆ 京阪三条駅→5番岩倉行（浄土寺下車）

## 相沢秀一先生を悼む

杉原四郎

相沢先生は去る六月二四日脳溢血で亡くなった。七六才であった。五月に不快感がつのり、やがて入院されたが、これほど早い逝去とは予想されなかった。数年まえから身体の衰えを口にされてはいたものの、お勤めの大学へは最近まで原論と学史の講義をされていたようだし、一九七六年秋の法然院での記念会で先生が「河上肇没後三〇年」について力よく話されたことがいまだに耳に残っているだけに、信じがたい思いである。



先生は一九二七年に京大経済学部に入り、河上肇の京大での最後の講義となった経済原論を聴いた。翌年四月に河上が辞職した時、先生は学生代表の一人として河上の自宅に辞表撤回を求めに赴いた。こうして先生は河上のゼミナールには入りえ

なかったものの、河上の影響のもとに先生の学風は形成された。一九三五年私は京都一中の四年生で先生の「公民」の講義をきいたが、今にして思えば、その頃先生は獄窓の恩師に思いをはせながら処女作『黎明期の市民経済学』に結実する研究を続けておられたのだった。

一九七六年秋、先生は経済理論学会第二四回大会で「河上肇の人と学問」と題する記念講演をおこなった。先生がそこで強調されたことは、「河上は正直な、人に騙されても人を騙すことのしない、しかも勇気ある一本気の情熱的な人間だ」ということ、そして河上の紆余曲折の生涯を一貫するものは「人間を愛する純真な気持ち」だということであった。この師にしてこの弟子あり、相沢先生の生涯を根底でささえたものもまた師と同じく熱烈な「人間愛」ではなかったか。この文章を書くにあたって『経済学原論』や『経済学とその周辺』など先生からいただいたかずかずの御著書をひもときながら、私はそうした思いをあらたにしたのである。



## 第三五・三六回河上祭

宮 本 公 子

河上祭の総括として何かにまとめておきたいと思っていたところ、河上肇記念会より原稿依頼があったので、私個人の文責においてこの間の経過について振り返ってみることにした。

河上祭が責任者のないまま放置されていることに気づいたのは昨年一月頃だった。委員はいるはずなのだが、前回からの引継が行なわれておらず、誰もやろうとしないため、実行委員会そのものも自然消滅しているらしかった。教官やOBにも河上祭のことを心配しておられる方が多く、また一学生として多少の責任も感じていたので、周囲の援助を頼りに河上祭再興を呼びかけてみることにした。

急遽準備した第三五回河上祭は今年の一月三〇日、一海・池上両氏に



講演をお願いしてようやく開催に消ぎ着けた。出席は約五〇人。試験期間中で学生が少なかったが、狭い会場は一杯になった。講演内

容はそれぞれ新たな河上像を浮き彫りにするもので興味深く、会場もちょうどゼミナールのような雰囲気だったので、討論の時間をとりたかったのだが、時間の都合でそれができず、残念だった。

第三五回の後、実行委員会では何度かの会合や合宿を行ない、河上祭のあり方をめぐる討論と河上肇についての学習とを行なった。戦後まもなくから今日に至るまで伝えられてきた河上祭が、京大における反戦・自由の伝統として果たした役割は大きい。社会や学生の変化に対応したもっと別のあり方を模索すべきではないか、と深夜まで議論した。ではどうあるべきなのか、については意見がまとまらず、ついに結論は出なかったが、とにかく三六回の準備をすすめよう、問題はそこでひとつひとつ具体的に解決していこう、ということになった。

わずか七名の実行委員会でも事欠き、準備も思うにまかせなかったが、企画は総花的で大風呂敷、これのできるのかと前日までハラハラし通しであった。第三六回河上祭の全日程は下記の様であった。





七月一五日、開会式。大橋隆憲氏より御挨拶頂いた後、「TV評伝河上肇」上映。これは百年祭の年にNHKで放映された一時間ほどの番組の録画である。河上肇の生涯を忠実に再現しており、感動的だった。参加約四〇名。

一六日、塩田庄兵衛氏講演。河上の生涯を概説された後、音読会の活動にふれ、河上が今なお多くの人々に関心を持たれている事実を強調された。参加約三〇名。

一七日、映画会。「にんげんをかえせ」（一〇フィート運動映画）「いちご白書」約一一〇名参加。講演のようなカタイ企画にはあまり参加が多くなく、講師に申し訳ないばかりなのだが、映画だとも人が集まるのかと感心。

一八日、ソフトボール大会。一二チーム参加。一ヶ月前からチームを募ったところ、予想以上の申し込みがあり、驚いた。

一九日、映画「予言」（一〇フィート 二弾）島恭彦氏講演。河上の

科学者としてのあり方に関連し、研究と実践との密接なかわりについて論じられた。

また、期間中行なわれた「河上肇展」は大変好評であった。これは百年祭の時に思文閣に展示された年表や写真のパネルと、図書室所蔵の著書・ノート類を、資料室の細川氏の御協力により展示させて頂いたものである。人通りの多いロビーに展示したため、多くの方々に見て頂けたと思う。

全体を通じて出席者は決して多くなく、多くの学生にアピールできたとは言いがたいが、宣伝や運営等の活動の中で、河上祭に対する好意的な反応が一定得られたことは収穫だった。一回生には河上肇を知らない者も多かったが、学部生には広く知られており、昨年潰れかけたことを心配する声もきかれた。また私自身も今回の活動を通じて、河上肇を今日に生かそうとする多くの方々と出会い、今なお多くの人に語られている河上の鮮烈な生き方が持つ意義の大きさを改めて感じた次第である。

最後になりましたが、

三五・三六回を通じ、物心両面に亘り御援助を賜りました河上肇記念会の皆様に、心より御礼申し上げます。

（京大河上祭実行委

員長）



河上 肇 著

「貧乏物語」鑑賞(2)

前 川 文 夫

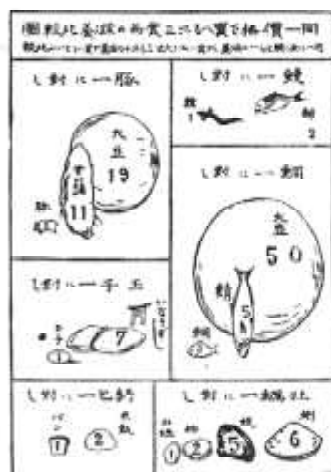
□

一概に貧乏人といってもその段階にはいろいろあり、明瞭な概念があるようで、その実決してそうは言えない。河上はこの書の中でまず貧乏人を明確に定義した。理想の人間生活、人間生活の目的を考えてみると、人間にとって大切なものが三つある。肉体、智能、靈魂（＝精神の意味であろう）がそれで、人間の理想的な生活とは、これら三つのものを全に維持し發育させていくことである。したがって、これら三つのものの自然的發達を維持していくために必要な物資を得ていないものがあるならば、その人達は全て貧乏人と呼ばれるべきである。しかし、知能も靈魂も無形のもので肉体のように物差しでは測れないから、便宜上、肉体のことだけを對象にしてその自然的發達を維持するに足るだけのものを飯に我々の生存に必要なものとみなし、それだけのものをもたぬものを貧乏人とするのである。肉体の自然的發達を維持するに足るだけのものとは何か。そのために彼は生活必要量なるものを定める。普通の人間が生活するに必要な食物の分量の最少限はすでに科学的に算出されている。彼はローンツリーによる調査を例示しているが、そうすると一定の物価のもとでの食費の下限が計算できる。同様に、被服費、住居費、燃料費、雑費の下限を算出し、それらの合計をもって普通の人間の生活必要費とし、こゝに貧乏線なるものを定める。そして、その線以下にあるもの、すなわち、それをこえる所得を有していないものを河上は貧乏人としたのである。したがって、肉体の健康維持という目的以外になん

らかの支出をするなら、そのときはそれだけ肉体の健康を犠牲にしなければならぬことになり、河上がこの物語で定義する貧乏人は非常に厳しいものと言えそうである。しかし、このように厳密に、しかも限定的にとらえても、世に貧乏人の何と多いことか。実際に彼は英国での実例（英国人の調査による）を示して、貧乏の実態を明らかにしていく。それによると、世界の最富強国と言われる英国においてさえ、ここにおいて意味の貧乏人が、何と全人口の三割をこえるというのである。一方で英国を最富国と言ひ、しかも、そこには肉体の健康を維持するだけの所得さえ得ていない貧乏人が非常に多いのである。——富める家にはやせ犬なしとさえいうものを、経済のはるかに進んでいる文明国のことなれば、金持にくらべてこそ、貧乏人といわれるものでも、必ずや相應の暮しをしているに相違あるまいと思うのに——事實はそうでなかったのである。これをどう解すればよいのか。

何ゆえに英国を世界の富国と言うのであろう。それを説明するために彼は全人口を次のように分ける。全人口の65%に当るものを「最貧民」といい、同じく、全人口の2%に当るものを「最富者」と名付ける、残りを「中等」とするとき、65%に属する最貧民のもっている富の量は、全国の富の量のわずかに2%足らずしかなく、逆に、わずか2%が属する最富者に所有する富の量は全国の富の量の72%に相当するといふのである。もちろんこゝで、全国といい、全人口と言っているのは、英国のそれぞれを指しており（書中では、英、米、独、仏、四力国について述べている）、米国の統計学者 キングが調査したものである。

これによってわれわれは、食うや食わずの貧民が実に多いにかゝわらず、英国が何故世界の富国と言われるのか、その理由を知りえたのである。すなわちそれは、巨富を擁するごく少数の大金持がいるがためにほかならぬ。



類田豊「安価生活法」口絵より

啄木は、「はたらけど、はたらけどなお、わが生活楽にならざり、ちっと手を見る」と歌ったが、今日の文明国にかくのごとき一生を終る者のいかに多いことか。——これ、河上が貧乏を二〇世紀における社会の大病と考えた根本の理由であり、——世間にはいまだ一種の誤解があつて、「働かないと貧乏するぞ」という制度にしておかないと人間はなまけて仕方のないものである。それゆゑ、貧乏は人間をして働かしむるために必要だ」という議論もあるが、少なくとも今

ではこれらの貧乏人は何ゆゑ貧乏であるのか。われわれはともすれば無職や失業中の人を想像するし、何か特別の事情があるのではないかと考える。しかし、事實はさにあらずで、主たる稼人は毎日規則正しく働いているのに、賃金が少なかったために貧乏人であるものが実にその50%をこえると言ふのである。それに対して、主たる稼人死亡のためや、失業中、またはその家族数が多いなどの理由によるものを合計しても、こゝに言う貧乏人の50%に満たないという。

日の西洋における貧乏は決してそんな性質のものではなく、いくらはたらいでも貧乏は免れぬぞという「絶対的の貧乏」なのである。——こゝにわれわれは従来の貧乏論にない河上の視点をおさえておかななくてはならないと思う。

こうした事態に対して、英國ではすでに多くの具体策がうたれていた。小学児童に対する「食事公給条例」や、「養老年金条例」などその主なもので、河上の最も尊敬する政治家、ロイド・ジョージがその先頭に立ち、貧乏征伐はすでに実行の段階にあつたのである。

しかし、わが国の事情はどうであつたか。国や政治家はもちろんのこと、個人の慈善事業としてさえ、その方に関心を示そうとするものはいなかつたという。これは河上自身が述べた当時の日本の状況である（三の四）。

さて、ではこうした貧乏人は何ゆゑ生れるのか、その根本原因が明らかにされねばならない。——毎日規則正しく働いていながらわずかに肉体の健康を維持するだけの衣食さえ得られぬ者が非常に多いというのに、他方には全く遊んでいながら驚くべきぜい沢をしているものも決して少なくない——、と言う。こんな不合理をひき起こす根本の理由は何か。

河上の言わんとするところはこうだ。今日の経済組織は需要のあるものに限り、それを供給するというのがその原則である。ところが需要とは単に要求というのと同じではなく、一定の要求に資力がともうてはじめて、それが需要となる。しかし、その需要は今日の社会では生活必需品に対する需要よりも、金持の要求する奢侈・ぜい沢品に対する需要の方がはるかに大である。そのために、多くの生活必需品がまず後廻しにされて、無用のぜい沢品が次々に生産されていく。一方、生産者の方でも、需要のあるもののみを生産し、たといいかに痛切な要求のあるも



のでも資力がない限り生産しないので、多数人の要求する生活必需品は絶対量において不足することになる、まさにそのことが貧乏人の生れるゆえんであるというのである。一口に、生活必需品の絶対量の不足が貧乏を生む、と言える。そうすると、河上自身が言うように——何故貧乏人が多いかと言えば生活必需品の生産が足りぬのだといい、何故生活必需品の生産が足りぬかといえば貧乏人が多いからだ——、となってしまう。しかも、さらにつけ加えて、貧乏問題は一見すると分配論に局限された問題のように言われているけれども、そうではなくて、実は生産問題と密接に関係するのだと言っている。

この河上の理論には、経済学をおよそ解せぬものでも首をかしげると思う。当然に、樺田民蔵の鋭い批判があったが、それについては場所をあらためて述べようと思う。

このように河上は、貧乏の生れる原因は生活必需品の不足にありとした。そして、それは今日の経済組織に一因あり、さらには富者の奢侈・ぜい沢が必然的に生活必需品を不足ならしめるといった。

これよりいよいよ私はこの書の主要テーマである「貧乏退治策」についての河上の理論を展開する。

まず第一は社会の経済組織を改めよといった。こゝで、河上はアダム・スミス以来の英国経済学について解説する。英国を祖としそこで育った経済学の根底に横たわる社会観とは、自由放任が政治の最大秘訣であり、個人のほしいままに各自の利益を追求させればそれによって社会全体の福利を増進し得る。すなわち、現時の経済組織を詬駁し、その組織の下における利己心の妙用を嘆美し、自由放任ないしは個人主義をもって政治の原則とするのが英国正統派経済学の旨である。かの有名な、スミスの国富論もこの理念の上に書かれたものであった。——、一切の保護干渉を取り去り、自然的自由という明白簡単な制度を自由に樹立せし

め、その制度のもとで各人は正義の法を犯さない限り、自己の欲するままに自らの利益を追求し、各個人は他の何人の事業および資本に対して、自己の事業および資本をもって競争することについて、全くその自由に放任される。——、しかし、この自由放任の経済組織こそが貧富の懸隔を生み、数々の悲劇を生む第一因となったのだ、事実、いかに国民の生活必需品であっても、その供給を営利を目的とする私人の事業に一任しておいては遺憾なく全国民にいきわたるはずがない。また、奢侈品の生産はいたずらに国の生産力を浪費することになる上、国民全体の上になんにも損害をもたらすことになっても、富者が金を出してそれを買う以上、営利を目的とする事業家は争ってその生産に資本と労力を集中するであろう。それは、従来の経済組織をもってしてはさけ難いことである。もはや、スミスによって産まれた個人主義の経済学はすでにその使命を終えて、いままさに新たな経済学の生れるときが来たのである。

これ河上「社会主義評論」以来の主張であるがこのあらたなる経済組織とは、——一切の貨物の生産を私人の営利事業に一任しておくような今の組織をかえて、重要な事業は大部分国営とし、直接国家がこれを経営していくこと、たとえば、軍備や教育のように——、と言うのである。こゝに、河上が

ミル自伝原書に書き込まれたもの（京大河上文庫蔵）



社会主義の経済組織を認め、それが社会の大病を治す有力なる策と考えたゆえんを知る。「社会主義評論」の主要テーマ、社会主義の経済組織を説明するためにこゝでも紙数の多くがさかれている。

今の世の中は金あるものにとつてはこの上なく都合がよからう。しかし、金のないものにとつてはこれほど不便至極の仕組はあるまい。経済組織の改造こそはいかにしてもなされねばならぬ絶対的の条件である。

しかし、こゝまでくると河上にとつていつも突きあたる大きな壁があった。それは若き日より河上の頭からはなれぬ問題であつたが、それより先きに、河上には別の心配もあつた。それは、いくら組織や制度を変えようといても、それだけの大事事をやつのけられる豪傑の出現を今の世に期待できるか。その方に全く関心を示さぬ当世であれば、その出現はまずありえぬであろう。さらに、当時社会主義ということばは特殊の響きをもっていた。河上自身もこの書の中でそうしたように、誤解を防ぐためにと断つて、それを経済上の国家主義という言葉にかえてゐる。

ともあれ、そうした理由以上に河上には生れながらにして頭からはなれぬ一つの信念があつた。それは、制度や仕組を変えてみたところで、その制度、仕組を運用するべき人間そのもの、国家社会を組織してゐる個人そのものが変わつてこぬ以上、根本的な改革などできるものではない、といったのである。このくだりは、毎日胸はずませて記事を持つ当時の読者は期待を裏切られたように感じたかもしれない。大内兵衛の解説の中にも、「河上はその説に反対であつたが、貧乏を退治する思想としては世界的には社会主義というものがあるということを示した。」とある。先に書いた「お説教」という批評もこの思いと関係していると思う。

しかし、これらの大家の批評に対して、私は必ずしも賛成でない。この辺りを正しく議論するためには、この書だけで判断するのではなく、

河上の前後の著書が充分検討されねばならぬと思うけれども、少なくとも、大内の言うように、「社会主義組織への改造に河上が反対であつた」と言い切れるのであろうか。なぜなら、例えば河上の次の言葉をどう判断すればよいのか。——個人の改良を待つてしかる後に社会組織の改造を行うべきであるかというに、個人の改造そのものが社会組織の改良に待つところがあるのだから、問題はいつまでも循環して果しなきこととなる。しかし、この因果の相互的關係の循環限りなきときどころに複雑きわむる世態人情の真相がある。それゆえに私は社会問題を解決するためには、社会組織の改造に着眼すると同時に、また社会を組織すべき個人の精神の改造に重きをおき、両端を改めて理想郷に入らんとするものである。(十一の四)

さて、話を戻して、次に貧乏退治の第二策人心の改造について河上の説くところを聞こう。そのために、私は重複を恐れず、貧乏の生れる根本原因をもう一度復習しておこうと思う。

そもそも、貧乏は生活必需品の絶対的不足のために生れるとした、もちろん、河上がマルサスを肯定していたはずがない。しかし、貧乏人にとっていかに必要であつても、それを購入するだけの資力がなければ生産者はそれを生産しない。従つて必要物資は欠乏し、貧乏人が生れると云うのであつた。そこで、必要量のだけの生活必需品が生産されるために第一策は経済組織を改造することにあり、そして第二策は、富者が資力にまかせてぜい沢をしないこと、すなわち、富者の心に訴えるを第二策とした。その理由は、富者がぜい沢品を求めればそれだけ世の生産者はその方の生産に力をそゞぎ、生活必需品は後廻しになる、したがつて、富者がぜい沢を止めれば世の資本は生活必需品の生産のために費されることになり、必然的に貧乏はなくなるというのである。先にも述べたが、この辺りは経済学の素人も不可解に思うところであらう。生活必需品の



不足が貧乏を生むということ自体、さらに、富者がせい沢を止めれば生産者は生活必需品の生産に向うのか、など素人なりの疑問がわく。この河上の主張に対して柳田は次の様に批判した。その要点は、貧乏問題は生産問題ではなく分配問題である。すなわち、貧乏の生ずる根本原因は富者の奢侈にあるのではなく、資本家による労働者の搾取に、つまり「所得分配の不平等」にあるのだから、「分配<sup>せふぶん</sup>修正」、組織の改造こそ貧乏の根本的解決策でなければならぬというのである。そして、河上のように、富者に対してその「倫理的自覚」を説くことは資本家にその利潤を放棄せよと奨めることで全く実行不可能であり、むしろ、労働者に対してその経済的自覚を求め、その自覚にもとづく「自助的組合運動」の進展をはかるこそ実行可能な唯一の方策であろうと主張したのである。(古田光「河上肇」より)

当節のわれわれには柳田の批判はもっともであり、河上の主張の不備に気付く。河上は貧乏発生の根本因を正しく解明していなかったと思う。しかし前述の通り、経済組織の改造の方は河上自身充分述べているし、もう一つ、われわれはこゝで、「当時組合運動はどの程度成長していたのか、そして社会主義経済について世間の人達はどれほど理解していたのか」これらをよく考えておく必要があると思う。人心改造が河上生来の願いであつたとしても、それら全てを天秤にかけた上での河上の主張であつたと解してはいけなうか。

ともあれ、一度は柳田に反論を試みた河上であつたが、やがては自ら非を認め、はるかなるマルクスへの旅に歩一歩と旅立つことになったのである。

しかし、われわれはこゝで、河上の主張にも耳を傾ける必要はないであろうか。すなわち、いくら社会組織が改造されたところで、人心が改造されなければ「石を包むに薄用をもってする(河上の表現)」ような

もので、遠からずして組織そのものが破れてくるというのであるが、この書はもともと一般民衆への啓蒙の書である。貧乏の実態分析など実に科学的であり、経済学の専門書としてわが国最初のものといわれているが、啓蒙の書としてならば人心を問題にしても決して不思議ではないと思う。それが河上のぬけがたき道徳主義から来ているとしても、また、そのためにこの書の科学的価値を乏しくしているとしても、この富者への警告・人心の改造を——それは東洋の儒教が千年来説きふるて来た一片のお説教であつた(大内評)——とするのはいかにも残酷である。私は、少なくともそこに従来の説教や軽薄な学者・政治家のそれとは異質の「河上の視点」を認めぬ訳にはいかない。(未完)

## 図書紹介

『河上肇——芸術と人生』杉原四郎・一海知義著、新評論、一九八二年一月、二、〇〇〇円。



本書は、現在河上肇研究の第一線の両先生による前著『河上肇——学問と詩』の姉妹篇として同一出版社から刊行されたものである。しかも前者とはちがった角度、すなわち河上のさまざまな体験、読書紀行、河上の作品、そして人々との出会いなどをとりあげ、河上の人間像を浮き

彫りにしようとしたものである。第三部両先生の聞き取られたご遺族羽村二喜男ご夫妻の「父河上肇を語る」は興味深い。

『河上肇そして中国——尽日魂飛万里天』一海知義著、岩波書店、一九八二年八月、二、三〇〇円。

著者は、漢詩人河上肇をテーマに『河上肇詩注』（岩波新書）、『河上肇と中国の詩人たち』（筑摩書房）などによって中国古典詩の鑑賞者として、さらに創作者として河上像を構築され、河上晩年の創造活動に新視角を提供された。本書はさらに「中国と河上肇」をテーマとして、



の空を翔けめぐったのだ」と。

『日本の意識——思想における人間の研究』住谷一彦著、岩波書店、一九八二年八月、一、八〇〇円。

本書は、日本「近代」が孕む問題を担った思想家群像が自ら織り、相互に結ぶ構造をDas Japantum（日本の意識）としてとりあげられたものである。沖繩字の伊波普猷と河上肇との出会い、交錯が本書の前半を占めている。

『先師先人』竹之内静雄著、新潮社、一九八二年六月、一、六〇〇円。本書一三二ページに「河上肇と小島祐馬」の一節がある。

『足まかせ京都』『居候』方坊記』デビット・クン著、文化出版局一九八二年八月、一、〇〇〇円。

『大きい日米間の落差 真の英雄・河上肇』の一章がある。（なお、この文は昨年『京都新聞』にて読む。「拝啓 貴方がたはどうして自国の誇るべき思想家、文学者、権力に屈せず生きてきた「逸民」を世界の人々に知らせず……」と鋭い現代的視点を提供された『京都学』の山口氏に筆者は感激した）。

## 河上肇全集（刊行順）

第三巻 解題 大野英二

一月刊

社会主義評論、人生の帰趣、『読売新聞』論説ほか（明治三十九年一月〜四〇年一月末）

全集月報1

伊藤証信氏と河上肇（吉田久一）、河上肇の周辺（河上莊吾）、失われた一通の書簡（帆足啓南次）、A資料紹介▽山本勇夫「人としての河上肇氏」

第二〇巻 解題 一海知義

二月刊

陸放翁鑑賞

全集月報2

挫折と平淡（村上哲見）、私の青春と河上博士（寿臣章子）、中国における河上肇の著作（呂元明、一海知義訳）

第三巻 解題 平井俊彦

三月刊

資本主義経済学の史的発展、大正一二年四月〜一二月末の論説

全集月報 3

河上肇とラスキン（木村正身）、河上肇の経済学史そのほか（出口勇蔵）、会えなかった「河上先生」（鈴木圭介）、A資料紹介

V 学界と人物 京大経済学部(4)

第九巻 解題 山之内靖

四月刊

貧乏物語、社会問題管見、大正六年一月〜七年九月の論説

全集月報 4

旅路をさかのぼる（長幸男）、『如何に生活すべき乎』（杉原四郎）、一度会った河上博士（目加田誠）、A資料紹介V公憤（『大阪朝日新聞』投書）

第十九巻 解題 松尾兌

五月刊

資本主義的搾取のカラクリ、『労働農民新聞』論説ほか（昭和五年六月〜七年六月）

全集月報 5

三二年テーゼと河上さん（村田陽一）、河上肇と新労働党（細迫朝夫）、戦前の「地代論争」と河上肇博士（井上周八）、A資料紹介V河上肇宛、鍋島貞親書簡

第一七巻 解題 杉原四郎

六月刊

マルクス主義批判者の批判、マルクス主義経済学の基礎理論

全集月報 6

土田杏村に宛てた河上肇の書簡から（上木敏郎）、河上肇に魅せられて（杉浦明平）、河上先生の想い出（山下ちゑ子）、A資料紹介V京都学連事件に対する経済学部有志教官の意見書

第二巻 解題 住谷一彦

七月刊

経済学原論上巻、日本専断論、明治三十八年五月〜三十九年一月の論説

全集月報 7

柳田国男と河上肇（岩本由輝）、明治末期農政思想の一断面（山下統一郎）、河上肇と京都の中国留学生（竹内実）、A資料紹介V福田徳三「河上肇君の所論を読みて」

第二二巻 解題 平井俊彦

八月刊

社会組織と社会革命に関する若干の考察、唯物史観の略解、大正一年六月〜一二年三月の論説

全集月報 8

福田・河上論争管見（山田雄三）、河上肇とマルクス主義哲学（岩崎允胤）、『自叙伝』出版のころ（青地展）、A資料紹介V河上肇講義ノート（大正一年）

以下、九月刊「第六巻 経済と人生ほか」、一〇月刊「第一〇巻 近世経済思想史論ほか」の予定。（事務局記）

× × × × × × × ×

A全集について一会員のお便りV

（前略）さて、河上肇全集の予約申込状況如何ですか。

河上肇などという人は史上稀に見る人物、彼の全集を読むという事は人生を知り、現代を知り、洋の東西を究むることとなり、万人必読の書と理解している次第ですが、彼の門弟又はファンの多くは既に世を去り、存命する者も喜寿に達して居ります。小生もその一人ですが、第一期二十六巻、第二期七巻、計三十三巻の最後の配本を受け取る時に八十歳に垂んとしている次第、且つ河上の著書は多少は読んで居りますので今更全集の予約申込みを為す可きや否やにつき迷った次第です。結局申込むべしという力に押されて申込みましたが、それだけに全集予約申込み状況が気にかかる訳です。

中々立派な全集本で全国の各図書館、経済学、宗教学、文学等を専攻する大学教授、高校教諭又は宗教家、社会主義者等の書架を飾るに相

応しい全集本と存じます。小生も二、三の友人に個人的に奨めて居りますが、河上肇記念会としても何らかの手を打たれては如何かと存じます。(後略) (二月二十五日付、大門英太郎宛、岡崎市の安藤重次氏より)

## 当 番 日 誌

◎代表世話人、杉原先生をお迎えして会の運営について指導を得る。会の発展に比べ事務局の非力敝い難く、どの程度、御指導に應え得るだろうか？ はなはだ心もとなく、それをさか、かに難波裏通りのリノに飲む。

◎会報11号の編集について、練達の編集者であった某会員より、不注意編集であるとして、事務局の一員である有吉氏に厳しい注意があった由、細川氏よりの電話にて知る。素人編集子の小生としては某会員にお願いして、会報編集の御指導を受けたいと思うこと切。編集に堪能な会員の方、ぜひ助けて下さい。

◎大門氏より、名簿の整理方法について説明あり。長年にわたる名簿の維持管理に感謝す。この際、名簿の維持更改には会の内外の方々のお力を借りないと、世の転変に対処出来ないが、いかゞすべきか？ はなはだ心もとなく、それをさか、かに難波裏通りのリノに飲む。

◎横光利一「旅愁」の一部を受験生教育のアルバイトに使った記憶がよみがえる。戦時における横光の言動を知らなかった訳ではない。異国の文化に対峙する精神の緊張が、左翼的風潮に同調するよりも重要に思えたからだ。昭和二十年代であった。いま、かえりみて、社会認識の浅薄な若気の愚かさを恥じる。軍備拡張の体勢は各界にビルドインの速度を増して、軍需景気が来たら救いの神と踊りかねない雲行き。軍拡、思想統制の方向を是としない者が、是とするに等しい行動をする。とても立派なことと言える柄ではないが、昭和二十年代において、戦中行動への

反省と責任追求の不徹底とが今日をもちたしている。いまからでも、戦中行動への批判と自己批判の運動は、死者に鞭打とうとも扯げねばなるまい。岩波版荷風日記一千九百四十四年三月八日に「某生の来書に曰く。三月下旬には必空襲有之由にて軍人等狼狽致居候。これは華族にもなれず恩賞金にも最初予想せし如くありつけぬ故なるべく、今更負戦さになりしとて総理の椅子を捨て、逃げかくれする訳にも行かぬが故なるべく滑稽笑止の至に御坐候。云々。

某生は誰であつたろうか？ それはともかく、かような事を日記に書いて、僅かに溜飲をさげざるを得なくなる事態は、どうしたら避けられるか？

(大久保記)

### 京都(きょう)に「煙」あり

1965年 創刊 只今43号

戦前日本プロレタリア文化運動の生き残り10名(68~78才)が出している異色の同人誌。埋れた青春像の発掘を柱に詩・歌・小説・エッセイもあり、各地、各界、各層からの便りを「声」欄に収めているのも特色

A 5判120頁 頒価500円 〒200円

### 「煙」 同 人 社

京都市中京区西ノ京藤ノ木町11の24

児 玉 誠 方

電話 京都(075) 811-7646番

振替 京都 2-15653番